

第 107 回国際理解講座 講演要旨

国分寺市国際協会
国際理解部会

第 107 回「国際理解講座」〈世界を知ろうシリーズ〉を 2024 年 12 月 7 日、本多公民館で開催しました。講師に防衛大学校名誉教授で中東の現代政治がご専門の立山良司さんをお迎えし、「続くガザ戦争と不安定化する中東」と題して講演をいただきました。聴講者は、ガザにおけるイスラエルとハマスの戦争にとどまらず、この戦争を契機に中東全体が不安定になっている現状を細部にわたりわかり易く解説され、今まで表面的にしか知りえなかった中東地区の混乱の実態がよく理解できたとたいへん好評でした。

以下に立山先生の講演の概要を要旨としてまとめましたので紹介します。

1. はじめに

2023 年 10 月 7 日、ハマスのイスラエルへの突然の越境攻撃で始まったハマスとイスラエルのガザ戦争は今日で丁度 14 か月になる。戦闘が収束に向かう兆しは全く見えず、逆にイスラエル周辺地域に拡大し、さらに中東全域に及んでいる。ハマス・イスラエル双方に犠牲者が多く出て悲惨な状態が続いている。

本日は、ハマスによるイスラエルへの越境攻撃に端を発したガザ地区でのハマス・イスラエル戦争を中心に、中東全域に及ぶ混乱、不安定な状況の今後についてお話したい。

2. ガザ戦争の発端～ハマスのイスラエルへの越境攻撃

2023 年 10 月 7 日にハマスがイスラエルとの境界を越えて突然イスラエルを攻撃したのは世界中を驚かせた。イスラエルは、ガザの周りに幅 100m の壁を 60km にわたって設置し、その壁の上に監視塔と監視カメラを付設し、ひっきりなしにドローンを飛ばして監視に当たっていたが、ハマス側はそれをかいくぐり塀を越えてイスラエルに侵攻した。この攻撃でイスラエル人など 1200 人が死亡し約 250 人がハマス側に拉致された。現在も 100 人程度のイスラエル人がハマス側の人質となっており半数は死亡していると言われている。イスラエルはこのハマスによる奇襲攻撃にショックを受け直ちにハマスへの報復攻撃を開始し、空爆と地上部隊による侵攻が続いている。イスラエルのガザ地区への攻撃で、ガザ地区の住民の死者は 44500 人、負傷者は 105,000 人を超えて（12 月 5 日現在）いる。住民は戦闘地域から逃げるが、逃げても逃げた先が次々と攻撃されるので住む場所がなく悲惨

な状態となっている。建物や上下水道、医療機関等の基本的インフラも破壊され、町は瓦礫の山になっていて衛生状態も悪化し感染症が拡大している。こんな中、国際刑事裁判所（ICC）はネタニヤフ首相やハマスの軍事部門司令官などに逮捕状を出したが逮捕される状況にはない。

3. ガザ戦争と連動したイスラエルとイスラエル周辺国との軍事紛争

イスラエルーハマスのガザ地区の戦争に連動した形でヨルダン川西岸でのイスラエルーパレスチナの衝突が激しさを増し、イスラエルはレバノンのビズボラ、シリアとイラク国内のイラン系武装組織、イエメン・フーシー派（イエメンの反政府組織）、さらにイランと全部で7地域、つまり7正面で軍事行動を展開している。特にレバノンでビズボラは2006年にイスラエルと大規模衝突（第2次レバノン戦争）した経緯もあり、イスラエルと敵対するイランの支援を受けてイスラエルへの攻撃を強化した。一方イスラエル軍はこれに対して空爆や砲撃などで応戦するとともに、9月中旬には攻撃を拡大し南レバノンにも侵攻した。イスラエルはビズボラ住民のポケベルに高性能爆薬をしかけて（誰がどのように仕掛けたかは謎）爆発させるなどビズボラに対して無差別攻撃を行った。ビズボラも激しく攻撃し激しい戦火の応酬となった。

このような状況の中、バイデン大統領の呼びかけを受けて11月27日、イスラエルとレバノンが13か月半ぶりに戦闘停止に合意し、60日間の暫定停戦がスタートした。この停戦合意の骨子は、イスラエル軍は南レバノンから撤退、ビズボラは戦闘員と重火器をリタニ川以北へ移動、リタニ川以南は国連レバノン暫定軍（UNIFIL）とレバノン政府軍が展開することで、60日間の停戦が守られ両者合意すれば恒久的停戦になる。但し、この合意事項に対してビズボラ側に違反があった場合は、イスラエルが軍事的対応を取る権利をバイデン政権が保障したとされている。違反があったかどうかはイスラエルが判定するとなっているのでどうなるか。

では、なぜ両者が停戦に合意したか、双方とも停戦したい事情があった。イスラエル側の事情は、イスラエルは戦争に強いと思われがちだが国力は必ずしも豊かでなく、ガザでの戦争はやめるわけにいかないのが兵士が不足、若い一般人を予備役として招集しているので経済を支える労働者も不足するなど軍、社会、経済が疲弊している。一方ビズボラ側も多数の幹部が殺害され兵器も破壊されているので政治的、軍事的にかなりの損失がある上、ビズボラを支援するイランが停戦に前向きなことなどが挙げられる。戦闘はイスラエルとビズボラの間だが、停戦の合意はイスラエルとレバノン

政府間で、レバノン国内でビズボラへの反発が出ているという事情もある。ただ、停戦合意中でも小規模な戦闘は続いていると見られる。

ここで、イスラエルとビズボラの後ろ盾になっているイランの関係に触れておく。イランは1979年のイラン・イスラム革命以降イスラエルを「抑圧者」として敵視した。これはいまでも変わらず、互いに相手を強い脅威と認識している。イスラエルはイランの核兵器開発を強く警戒しイランの科学者を暗殺するなど妨害工作を行い、シリア、イラクなどのイラン関係組織を繰り返し攻撃している。イランはビズボラやハマスなど反イスラエル勢力を支援してイスラエルへの攻撃を後押ししており、イスラエルとイランには「影の戦争」があるとされてきた。しかし、報復の連鎖の結果、「影の戦争」から「表の戦争」になりつつある。現に10月にイランはイスラエルに弾道ミサイルで攻撃し、イスラエルは公然と報復攻撃を行った。イスラエルは軍事目標に限定したと言っているが、かなり大規模な攻撃で核兵器開発関連施設も対象になったとも言われている。もう1つの問題はイランに核兵器開発の兆しがあること。イスラエルはイランの核兵器開発を極度に警戒し、阻止のための妨害工作をしている。一方イランは核兵器開発を否定しているがイランが核兵器開発を進めている可能性はある。

4. イスラエル・パレスチナ戦争の歴史

イスラエル・パレスチナ戦争はどういうことで始まったか。19世紀は民族主義＝ナショナリズムの世紀と言われ、19世紀後半にはヨーロッパ各地にいたユダヤ教徒（人）の間でもシオニズム（ユダヤ民族主義）が生まれ、パレスチナに移民してユダヤ人国家の建設を目指した。このためパレスチナに住んでいたアラブ人と対立した。この対立に関し1947年に国連総会でパレスチナ分割決議が採択され、パレスチナを分割してユダヤ人国家とアラブ人国家の樹立を決議した。この決議に基づいて1948年にイスラエルが独立を宣言し建国した。その直後からイスラエルと周辺アラブ諸国とで第1次中東戦争が起こった。戦争は1949年に終わったが、イスラエルは支配地域を拡大する一方、パレスチナ難民が多く発生した。さらに1967年には第3次中東戦争が起こり、この戦争でイスラエルの支配地域は一気に拡大、東エルサレム、ヨルダン川西岸、ガザ地区、ゴラン高原、シナイ半島を占領した。

5. パレスチナ民族解放運動の変化

イスラエルの存在を認めず、パレスチナ全土の解放を目指すパレスチナ人の民族主義者たちは1960年代からアラファト率いるファタハを中心とす

るパレスチナ解放機構（PLO）が活動する。PLO にはイスラム教徒が多いが宗教的側面は強くない。1980 年代後半になって、イスラエルと武力闘争を続けても突破口が開けないことから、もっと現実路線をとってイスラエルと共存しようという動きが出てきた。この動きは、第 3 次中東戦争以降のイスラエル占領地にパレスチナ国家を樹立しイスラエルと共存するというもので、二国間解決案あるいはミニ・パレスチナ国家構想と呼ばれた。それが 1993 年にイスラエル・PLO 間のオスロ合意（暫定自治合意）となり、1994 年にパレスチナ自治政府が樹立され、自治による統治が開始された。

PLO の中心的勢力のファタハとは別に、ガザでイスラエルと戦争状態にあるハマスについて説明する。ハマスはガザのイスラム組織「ムスリム同胞団」を母体に 1987 年に誕生し、イスラム主義（イスラムの教えを政治などで実践）を掲げ、パレスチナ全土の解放を主張し、イスラエルを認めずオスロ合意に反対し、「武力解放闘争」つまりイスラエルが「テロ」と呼ぶ活動を続けてきた。アメリカやヨーロッパの主要国は、ハマスをテロ組織と認定し、日本もハマスを制裁している。アラブやイスラム諸国はハマスと一定の関係をもっているが過激主義を警戒している。イランはハマスを支援している。ハマスは 2007 年以來ガザを実効支配し、教育や福祉、医療、水道事業等の行政サービスを行ってきた。これに対しイスラエルは、ガザ地区全体を壁（塙）で囲み封鎖しているためガザは「屋根のない刑務所」と言われている。封鎖のため資材や電力、水などが不足し経済も衰退している。さらに今次の戦争で多くの建物が破壊され、国連の推計によると本年 6 月で瓦礫が 4200 万トンに達している（東日本大震災時の被災地全域での瓦礫は 3 千万トンと推定されている）。

1993 年のイスラエル・パレスチナ間でのオスロ合意では、イスラエルが西岸・ガザから撤退することが想定されていたが、イスラエルは入植を続け、未だに独立国家ができず占領が続いている。和平が実現しない理由は、相互の不信感やテロ等の暴力の応酬、西岸のパレスチナ自治区が飛び地で島状になっているなどがあるが、最も重要な理由は、イスラエルは主権国家で占領者だが、パレスチナ側は国家ではない被占領者であるという、両者が非対称な関係にあることである。

このような状況の中でハマスが大規模な攻撃を行った背景は、イスラエルによる封鎖が続きガザが困窮の状態にあること、2020 年に UAE などのアラブ諸国がイスラエルとの関係を正常化し、サウジも正常化に前向きで、大事なパレスチナ問題が置き去りにされている不安などから、ハマスとして

も手をこまねてはいられないという事情がある。これが直接的な背景だがもっと大きな背景として、イスラエルによる占領地の実質的な併合が進行している上に、イスラエル独立から76年経ってもパレスチナ問題が解決していないことだと思う。一方イスラエルではここ20年間に、パレスチナとの共存を否定してパレスチナ国家樹立に反対する動きや、力の行使を重視するなどの右傾化が顕著で、加えて神がユダヤの民に約束したとされる「約束の土」というユダヤ教の思想に基づき占領地（ゴラン高原、ヨルダン川西岸、ガザ地区）を絶対に手放さないという大イスラエル主義を掲げる宗教シオニズムが台頭するなど宗教化が進んでいる。

イスラエルは、①イスラエルをユダヤ人が多数派である国として維持する、②大イスラエル主義を貫いて占領地を手放さない、③完全な民主主義を実現するという、3つの国家目標を掲げている。しかし占領地を含む現在の支配地域でユダヤ人とパレスチナ人の人口はほぼ同数で現実には2民族国家である。加えてユダヤ人の優位性を強調しパレスチナ人の社会的、政治的権利をないがしろにしているなど民主主義も劣化している。結局現在のイスラエルはこの3つの目標を同時に達成することができないトリレンマに陥っている。

6. ガザ戦争の今後～将来

ハマスのイスラエルへの越境攻撃で始まった Hamas とイスラエルのガザ戦争と、この戦争を契機に中東全体が不安定になっている現状について述べてきたがガザ戦争がこの先どうなるのか。

まず、停戦・人質解放交渉は行き詰まっている。停戦も人質解放も実現していないのは、双方の主張が対立しているからだ。イスラエル（ネタニヤフ首相）は人質全員の解放を要求するとともに、ガザからイスラエル軍を完全撤退することを拒否し、戦闘再開の権利を要求している。他方、 Hamas 側はイスラエル軍のガザからの完全撤退、完全で恒久的な停戦、人質解放とパレスチナ人囚人の解放を要求して交渉が行き詰まっている。イスラエルが戦闘を継続する理由としては、ネタニヤフ首相の政治的な思惑・保身がよく指摘されるが、イスラエルのユダヤ人の Hamas に対する恐怖心が強いことも要因となっている。アメリカのキッシンジャーの名言と言われている「ゲリラは負けなければ勝ち、国家の軍隊は勝たなければ負け」の通り、 Hamas はこれからも負けることなくゲリラ戦を続けると思う。一方イスラエルは出口戦略も戦後計画も持たず長期駐留の構えで、今後ガザの将来がどうなるか全く予測できない。

アメリカの大統領選挙でイスラエルを強く支持するトランプ氏が再選されたことで、次の政権はガザでのイスラエル軍駐留、西岸での入植活動や併合を容認するなどイスラエル寄りの政策をとることが予想される。イランの核兵器開発問題に対しては、経済制裁を強化するなど最大限の圧力をかけるであろうが、何かディールを試みるかもしれない。さらにイラン包囲網の形成のためサウジとイスラエルの関係正常化を目指すであろう。

これからも中東地域は色々なリスクを抱え不安定な状態は続く。主なりリスクとして、ガザ戦争の継続と暴力の連鎖、イスラエルとイランの対立構造の継続、イランの核兵器開発に対抗しイスラエルとアメリカがイランを軍事攻撃をする危険、また、他の中東諸国による核兵器開発の連鎖、イラク、レバノン、シリアなど中東、アフリカの国々の脆弱な統治体制などが挙げられる。ガザ戦争に触発されてシリアの内戦の再発も予測される。

7. 終わりに～イスラエル・パレスチナの平和構築はできるか～

イスラエル、パレスチナ、それぞれが内部に問題を抱えており、平和構築は難しい。イスラエルは1国家2民族状態が続き、民主主義の劣化、国際社会での地位の下落等の問題を抱えており、パレスチナはガザでも西岸でも内部対立があつて暴力的対立が激化する恐れがあるなどの問題を抱えている。イスラエルとパレスチナ双方が共存の道を探るしかなく、パレスチナ人が平和に生きていくための何らかの新しい考え方、新しい将来構想を提示できるかが最大の課題といえる。国際社会が絶え間ない和平の働きかけと国際法の順守を呼びかけ続けることも重要と思う。

最後に、本講演で予定していなかったが、ガザで起きた事態がシリア内戦を活発化させたと言われているのでシリア情勢を簡単に述べる。

シリアも他の中東諸国と同様統治体制が脆弱で、アサド大統領の独裁政権に対抗する反政府勢力との間で内戦が続いている。アサド政権はシリアを支持するロシアやイランの支援を受けて反政府勢力をシリア北部に押し込んでいた。しかし、11月下旬に反政府勢力は突然、攻勢に転じて北部のアレッポ、さらに南のホムスを制圧し、さらに南下して首都ダマスカスを目指して進んでおり予断を許さない情勢になっている。

以上

(本講座の翌日の12月8日シリアの反政府勢力が首都ダマスカスを制圧しアサド政権は崩壊、アサド大統領はロシアに亡命したとのニュースが報じられた。)

質疑応答の抜粋 (Q: 聴講者の質問、A: 立山先生の回答)

Q パレスチナ人の中では西岸とガザはどのような関係か。

A 西岸とガザは、イスラエルの建国後、物理的にも繋がっていない。歴史的には西岸はシリアと、ガザはエジプトとの関係が深い。パレスチナ人としての一体感はある、かつては自由に行き来ができていた。しかし2007年にガザを Hamas が実効支配し、イスラエルが封鎖したため、今は自由に行き来できず、経済的にもつながりは乏しい。

Q パレスチナ人の中で Hamas はどのような位置づけか

A ガザ戦争が始まった当初、ガザにおける Hamas 支持は高かったが、戦争の長期化でガザにいるパレスチナ人は苦しい状況になっているため、支持は徐々に減少している。しかし、イスラエルと実際に戦っているのは Hamas なので、一定の支持=30%くらいの支持はある。Hamas とイスラエルの対立関係が改善する展望はないので、今後どう展開していくか予測できない。

Q これだけの対立が進んでいる中で日本の立ち位置はどう見たらよいか。

A 国際的には日本も含めてほとんどの国がイスラエルとパレスチナを独立国家にするという二国家解決案を繰り返し提案している。今のところ実現の可能性は少ないが外交的には主張続けることが重要だと思う。

Q 宗教化や右傾化が進んでいるというイスラエルで停戦を望む声があつてデモも行っていると聞くが人数的には少ないということか。

A 停戦デモに関する報道が多いが、「攻撃を続けろ」というデモも同じくらいある。世論調査でも同じ結果となっている。イスラエルでは Hamas を壊滅させない限り停戦してもまたイスラエルを攻撃するとの不安が根強く、イスラエルの Hamas に対する脅威の意識は捨てきれないので停戦は難しいと思う。

以 上